



此度の若山五胡君の御遭難に対し、私共大阪市立大雪山岳部一同、このおかしからお悼み申し上げます。すぐ目の前北尾根に居り、声も聞えずに聞きながら、何とも出来なかつた私達の非力を残念に思い、自ら恥じると共に、亡き五胡君をはじめ、御家族、岩稜会の皆様、深く御詫言申上げます。

同封しました写真には、パーティ三人の姿が微に写って居ます。これは、恐らく五胡君最期の写真と思ひます。

この冬、山、私達は北尾根を慶應尾根から取り付き八峰下にベリス・キャンプを設け十二月三十一日に五・六のころにオーキャンプを作りました。元旦には大島と橋本信行が四峰頂上より奥又側へ出てくる屋根を約三ナ米行ったお蔭にツエルトを張って前穂へのアタック・キャンプとすることにしました。丁度、東壁Aフェースの下、大きな雪の斜面にトツポが出たところでした。雪の中に跡り、柿色のサイルを白い雪の上に垂してトツポが確保の体制をとった頃、私は、カンバルヨールと声を掛けました。カンバルヨールという言葉を返事を聞いて、私達は人は岩蔭の雪を除き、ツエルト

を張り、オニキヤンプの夜を過す用意をしました。

ツェルトを張り終って東壁を見るに、今しもあきり二人が雪の斜面へ出て来たところ。記念にと一枚撮ったのです。どうか、この写真を見て、私共の哀悼の意を五朗君の御霊にお伝え下さい。

徳沢で登高会の方などから遭難の事情を詳しくお聞きし、又帰ってから中日新聞の、ニッポ遭難とナイロン・ザイルを讀ませ、て戴き、詳しい事を知ったのですが、遭難の直接原因がザイルの切断によるものである事を知り、皆称の由無念如何にもお察し致します。

ナイロン・ザイルの切断。——実は私達もこのナイロン・ザイルの切断を体験したのです。しかも五朗君遭難の翌三日、場所も前穂三峰で。

三人の東壁登攀をカメラに収めた後、一人が池の方へ平を振るのを見てから、私達はツェルトに潜り込んだのですが、炊事をしながら、一度外を見た時はもうガスがかかっている声だけが聞こえていました。四日市に家のある橋本は、アラヨークを聞いて

岩稜会と知っていました。オニヤンクまで持ってきた携帯ラジオ
も聞くと、松本放送で、元旦の北アルプスは快晴で、大阪市
立大学、岩稜会……が夫々前穂高北尾根奥又白……で
……と云うのを聞くと嬉しくなりました。天気予報はあま
りいいものでありませんでした。何所までも聞えてくる東壁
登攀の声に、いよ……ビバ……なんだな、大丈夫なんだらう
か。と二人で色々想像し、話しながらも、早く寝ました。
翌二日、朝早く私達は一旦ツェルトを出、アタックに出発し
ました。吹雪に三、四のころから引返しました。帰ってしばらくすると
アラヨー、が聞え、登り切ったのかな、と思っただけですが、その後
時々聞えて来、アラヨー、は遠くかすかに聞えたり、近くなったり、
何か何だか訳がわからぬようなもので、ただ異常感だけを
はっきりと感じさせました。釣尾根を奥穂の方へ行っているよう
だったり、三峰の上方へ出て来たように近くになったり、して
一体サボート隊なのか登攀隊なのか全然分らず、いりりから
相図をしてみようかと相談したり、したのです。結局は下手に

相圖を、この間違つてはと思ひとまったのです。

色んな想像に一日中息もつまりそうな気持ち味わったものです。三日は少しでも天気が良くなれば飛出そうと待機し。

午後になってツエルトをおまじした。

思わすこの下だ、というような声も間近かに聞いて見上げると東壁の上に人影が四つ五つ、シルエットを描いています。

時間的にもとも無理だが行りまた行りしてみようとコルへ下り三峰に取付きました。

コルからやや酒沢側も五米乃至十米登って稜線へお、雪の、さい、鞍部で橋本が確保し、大島がトツプで奥又側を覗きながら

約六、七米登ったと記憶しています。オリバー・ハンガの下の岩に立ち上りした時、バランスが崩れ、奥又側へ墜落。同時に橋本は、一

歩酒沢側へ下ってシヨックに備えたのです。何時まで経つてもシヨックが全然来ないので、恐るく、ザイルを引上げながら覗く

とザイルが切断していったのです。

ザイルは TOKYO ROPE No. GK 10078 東京製綱ナイロン十一号で、

十二月に購入して、この冬山に初めて使用したものであります。

切断は、大島から四米、五十握の所で起つて居り、約十五握は、はらくにほぐれて居り、あたかもザイルの搓を戻して引き抜いた

ような感じでした。そこから約十握は三つに搓がほぐれて所々、部分的に繊維が切れています。更に約十五握は岩を擽った跡

があります。大島の体重は当時の装備付きで十七貫、奥又へ

フルも約十米下った雪の中に墜つていて、橋本に連れられツェルト

迄歩いて帰つたのでありますが、その間の記憶は全然ありません。

尻尾全体を打つて居り、翌日歩くのに相当不便を感じたので、ほか

他に傷はありません。

ザイル切断の原因については、兩人が墜落地臭の状況を明

確には覚えていないので、不明、不確実なところがあり、目下ザイル

の切断箇所について研究しているところであり、また、確定的な答を出

せないのですが、取敢えず、ナイロン・ザイル切断の事をお知りせ

して置きます。

登山界にナイロン・ザイルの普及、レップがある限り、再検討を要す

る事故、徹底的に切断の原因を究明したく思っています。

これこそ亡き五朗君に対する最大の慰めと信じています。

よろしくお指導、お教授下さい。

奥又の雲に眠る五朗君の魂の安からんことを祈り

筆を置きます。

一月十六日

大阪市立大学山岳部

大島 健司

石稜会

石岡 繁雄 称